様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０１０８

研究課題名（和文）ウィリアム・フォークナー文学における白人性とミンストレル的想像力の研究

研究課題名（英文）Whiteness and Minstrel Imagination in William Faulkner's Fiction

研究代表者
永尾　悟（Nagao, Satoru）

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：８０３８９５１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ウィリアム・フォークナー文学における白人性構築について、アメリカの大衆演劇ミンストレル・ショウが表象する白人性の概念に基づいて考察する。フォークナーが白人に仮面のイメージを重ね合わせていた点がミンストレル的仮面のパフォーマンスであるという前提に立ち、白人／黒人の人種的相互作用によって構築された白人性の危うさを暴き出すフォークナーの文学的想像力をとらえることを目的とする。アメリカの人種意識を反映するミンストレル文化とフォークナー文学の接点を明らかにし、近年注目されている白人性研究の理論的枠組みを援用することで、領域横断的視点からのテクスト研究を試みた。

研究成果の概要（英文）：This research is intended to explore the representation of whiteness in William Faulkner's fiction in the cultural context of minstrel performance. Focusing on the racial identity formations of both white and black characters, it argues how Faulkner portrayed the complex racial dynamics of the American South.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ウィリアム・フォークナー　白人性（ホワイトネス）　ミンストレル　アメリカ南部

１．研究開始当初の背景

人種はウィリアム・フォークナー研究における中心的テーマだが、それは主に黒人性と結び付けられて論じられることが多く、人種に深く関わるはずの白人性が議論の対象になることは少なかった。しかし、サディアス・M・デイヴィスが述べるように、フォークナーは、黒人性と同じく白人性も文化的構築であることを作品の中で描き出している。デイヴィスの指摘は、フォークナーのテクストと彼自身の白人性がパフォーマティヴなものだと主張するジョン・N・デュヴォールと同様に、南部的白人性を再配置しようとするフォークナー研究の新たな流れを示している。

パフォーマティヴな白人性を考察するためのアメリカ文化的視点として、ミンストレル・ショウにおける白人性表象の概念を作品分析に援用した。ミンストレル・ショウは、白人役者が黒さを装うパフォーマンスとして始まったが、彼らが白い顔のままで演じるアルビノ・ミンストレルや、黒人役者が黒塗りで黒人を演じたり、逆に白塗りで白人を演じたりする形式も登場するようになり、ステレオタイプ的黒人をパロディ化するという以上の意味を帯びていった。このような表現形式の多様性と多義性にもかかわらず、その人種の仮面は、「ほとんど中身のない白さに還元された」というデイヴィッド・R・ローディガーの指摘は、ミンストレルとフォークナー文学とを結びつけるヒントを与えてくれる。なぜなら、人種を仮面のイメージとしてとらえていたフォークナーの言語的パフォーマンスは、南部作家としての彼の白人性を映し出すからである。

２．研究の目的

本研究は、ウィリアム・フォークナー文学における白人性構築について、アメリカの大衆演劇ミンストレル・ショウが表象する白人性の概念に基づいて考察した。フォークナーが白人に仮面のイメージを重ね合わせていた点がミンストレル的仮面のパフォーマンスであるという前提に立ち、白人／黒人の人種的相互作用によって構築された白人性の危うさを暴き出すフォークナーの文学的想像力をとらえることを目的とした。アメリカの人種意識を反映するミンストレル・ショウ文化とフォークナー文学の接点を明らかにしながら、近年注目されている白人性研究の理論的枠組みを援用することで、領域横断的視点での文学研究に結びつけることを目指した。

３．研究の方法

本研究では、フォークナーのテクストにおける黒さ／白さの演出が南部白人性の危うさを露呈する点について、ミンストレル・ショウの文化的意義と重ね合わせながら、次の(1)～(3)の研究内容に取り組んだ。

① 大農園制度の生成と崩壊にまつわる白人性構築について、*Absalom, Absalom!*（1936年）と *Go Down, Moses*（1942年）を中心に論じた。*Absalom, Absalom!*においてはトマス・サトペンの大農園主としてのふるまいと白人性構築の関係に着目し、*Go Down, Moses*においては大農園制度崩壊後における人種関係の変化に伴う南部白人男性のアイデンティティの揺らぎについて考察した。

② 法と共同体の中で形成される人種の差異と白人性について、*Intruder in the Dust*（1948年）を中心に考察した。*Intruder in the Dust* は出版翌年にフォークナー自身の監修のもとで映画化されているので、原作と映画における白人性表象について比較した。

③ フォークナーのミンストレル的想像力と白人性構築ついて、文学作品以外のテクストも踏まえながら検証した。まず、ミンストレル的想像力の出発点になった初期作品におけるミンストレルと人種表象についての変遷について考察した。そして、エッセイや書簡などにおけるフォークナーのパブリック・コメントを時代背景や他のアメリカ知識人との相互関係を踏まえながら読み解き、そこに浮かび上がる彼の白人性が文学テクストといかなる連動と差異を示すのかを論じた。

上述の研究目的を果たすため、本研究ではフォークナーの作品執筆当時の人種にまつわる歴史・文化的資料をできる限り多く確認するようにした。1930～40年代のミシシッピ州で発行された新聞や雑誌等については、南ミシシッピ大学附属図書館に赴き、原典資料およびデータベースを調査した。また、同時代の南部に対する黒人作家たちの考えを探るべく、ニューヨーク市のションバーグ黒人文化センターに赴き、未刊行の手紙、日記、原稿などを閲覧および複写した。フォークナーの重要な一次資料はおおむね調査されたと言えるが、時代背景にまつわる資料は調査の余地が大いにあるため、今後も引き続き同様の資料調査・収集を継続する必要があるだろう。

４．研究成果

本研究で特に着目したのは、小説の中で人種を描いた 30 年代までのフォークナーが、作家としての地位を確立した 40 年代以降になると小説以外の媒体で人種について積極的に語るようになった背景である。30年代に書かれた *Light in August* や *Absalom, Absalom!*では、南部の歴史・文化的背景と結びつく人種の諸問題を、家系譜や人物関係の中で物語化しており、その象徴性と表象性の

複雑さによってフォークナー自身の人種に関する立場は見えにくくなっている。この傾向は *Go Down, Moses* にも引き継がれているが、作品の中心人物であるアイク・マッキャスリンの人種認識について、少年期と老齢期の間にある差異あるいは矛盾は、フォークナーの立場の変化を予兆するものだと考えられる。

Go Down, Moses から 6 年後に出版された *Intruder in the Dust* は、公民権法制定へと向かうアメリカの潮流に逆行していた南部の人種問題について、フォークナーの政治的見解が読み取れる作品である。ノーベル文学賞受賞の前年に出版されたこの作品は、彼がアメリカ文学の主要作家として再認識されるようになってから最初に執筆した長編小説であり、フォークナー自身の立場の変化を反映したものであろう。このように、*Intruder in the Dust* は、フォークナー個人の人種観が曖昧に映し出されてきたこれまでの表象空間とは一線を画した小説だと言える。

1950 年代におけるフォークナーは、小説世界ではこれまでのように人種関係を描かなくなるが、南部白人のスポークスマンとしてエッセイや演説の中では積極的に人種について語るようになる。たとえば、黒人雑誌 *Ebony* に寄稿した“If I Were a Negro”（1956 年）は、黒人評論家 W・E・B・デュボイスの問いかけに対する応答であり、自らの人種に関する発言について解説をしたものである。このようなフォークナーの立場は、フィクションとは異なるかたちで南部白人作家としての自意識を映し出すものである。つまり、国際的な認知を得たことでフォークナーは、彼自身の白人性をパフォーマティヴに構築していったのである。

上記の研究成果は、平成 25～27 年度に行った学会発表、シンポジウム、および研究論文として公開されている。そのうち最終年度にあたる 27 年に主催した九州アメリカ文学会のシンポジウムでは、フォークナー以外の南部作家も考察の対象として、彼らの作品に映し出される白人性表象の多様性と共通性について分析を試みた。これによって生じた新たな課題は、フォークナーや同時代の白人作家たちが南部を媒介としつつ構築しようとした「白さ」に対して、同時代の黒人作家たちが示した反応について考察する必要性である。南部出身のリチャード・ライト、そして北部生まれでありながら南部への強い関心を示していたジェイムズ・ボールドウィンについては、黒人性に着目しつつ作品を読む南部と白人性という観点から彼らの著述を読み解く意義は十分にあるだろう。白人／黒人作家たちの人種と南部をめぐる相互交渉は、地域性や時代性という枠組みを超えた知的、文学的潮流を生み出しているため、この点を今後の研究の課題として考察していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①永尾　悟、「『行け、モーセ』におけるアイク・マッキャスリンの白人意識」『フォークナー』査読有、第 16 号（松柏社、2014 年）91－99 頁

②永尾　悟、「『墓地への侵入者』における白人南部の心象地図」『熊本大学文学部論叢』査読有、第 106 号、119－129 頁

③永尾　悟、“Hearn and ‘Of the Eternal Feminine.’” Lafcadio Hearn Studies 査読無　Vol.3 (2016) 13－16 頁

〔学会発表〕（計３件）

①永尾　悟、「『行け、モーセ』におけるアイク・マッキャスリンの白人意識」日本ウィリアム・フォークナー協会第 16 回大会（2013 年 10 月 11 日 立教大学）

②永尾　悟、「ウィリアム・フォークナーの『墓地への侵入者』における南部白人性」熊本大学英文学会第 58 回大会（2014 年 11 月 15 日 熊本大学）

③永尾　悟、「*Intruder in the Dust* における白人南部の「情緒的な」地図」九州アメリカ文学会第 61 回大会シンポジウム「アメリカ南部と白人性」(2015 年 5 月 10 日 鹿児島大学）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
永尾　悟（NAGAO Satoru）
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：80389519

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし